

科学研究費補助金について

1. 平成 23 年度の科学研究費補助金の採択状況

平成 23 年度の科学研究費の採択内定の通知も既にありましたが、本年度は、基盤(C)、挑戦的萌芽、若手(B)等については、複数年度にわたる使用を可能にする「基金化」の為の法案の成立を待って、内定通知が行われる予定です。参考のために、基盤(A)と基盤(B)の平成 23 年度および平成 22 年度の新規採択の件数と採択金額を下記に示しておきます。以後データは科研費データベースによります。

平成23年度 新規採択 単位千円				平成22年度 新規採択 単位千円			
	細目	件数	採択金額		細目	件数	採択金額
基盤(A)	代数学	2	12,100	基盤(A)	代数学	3	19,000
	幾何学	2	11,200		幾何学	3	20,600
	数学一般(含確率論・統計数学)	1	9,800		数学一般(含確率論・統計数学)	1	12,000
	基礎解析学	2	14,000		基礎解析学	2	11,900
	大域解析学	1	19,100		大域解析学	1	7,300
	小計	8	66,200		小計	10	70,800
基盤(B)	代数学	10	27,400	基盤(B)	代数学	10	26,900
	幾何学	8	24,900		幾何学	5	11,100
	数学一般(含確率論・統計数学)	7	24,100		数学一般(含確率論・統計数学)	7	24,600
	基礎解析学	7	22,500		基礎解析学	7	21,500
	大域解析学	5	15,300		大域解析学	8	18,800
	小計	37	114,200		小計	37	102,900

これによりますと、新規採択については、金額、件数とも、それ程変化していない様です。ただ、今後基盤(C)等の採択状況によって、今年度の採択の傾向が見えてくると考えられますので、次号で再び検討したいと思います。

2. 数学分野の申請数の減少の問題

昨年度、数学分野の申請数の減少が指摘されました。詳細なデータは省略しますが、平成 13 年度、数学分野全体で 1768 件あった申請が、平成 22 年度には申請数が 1295 件になり、件数にして 470 件程度、割合で約 27 パーセント減少しています。一方で、全分野申請数は、平成 13 年度が 73826 件、平成 22 年度が 84638 件と、約 14%増加しています。

同じ数物系科学に属する物理学分野全体でも、H13 年度の申請数が 1921 件であったのに比べて、平成 22 年度の申請件数は 2014 件であり、約 5%増加しています。数学と物理は同じ数物系科学の専門分野に属し、補助金の各専門分野毎の新規の配分は、申請件数と申請金額に 1/2 ずつ比例して決められますから、数学分野の申請件数の減少は大きな問題と言えます。従って、この減少の理由をなるべく正確に把握しておくことが重要であると思われます。科研費データベースには、採択されたすべての研究課題の情報が載っていますのでその情報を用いて、解析する事を試みました。

まず、下記の表をご覧ください。この表は、平成 23 年度と平成 13 年度の数学分野に交付された科学研究費の全体を採択年度別、種目別に記したものです。数値については、科研費データベース等の資料から取りましたが、追加採択も含まれていたり、特殊な科研費を省略したりしていますので微妙に数字が異なるかもしれませんのでご容赦ください。概数とお考えいただけます。これを見ますと採択件数で、平成 13 年度の 1034 件から平成 22 年度の 1328 件と件数が 294 件増えています。挑戦的萌芽等の重複申請できる分野もありますが、基本的に既に採択されていて、継続の科研費を持っている人が 250 人以上増えていると考えられます。実際平成 12 年度に次年度継続の科研費は 592 件、平成 21 年のそれは 892 件でありました。約 300 件、継続の科研費が増えている事になり、これが新規の申請件数を減らしているという事が言えるでしょう。特に若手（B）と基盤（C）の研究期間の延長が大きく影響しているようです。

平成22年度(2010年度)の数学分野の新規および継続の科研費採択件数(採択年度、研究種目別)

採択年度	2010年度 新規	2009年度 より継続	2008年度 より継続	2007年度 より継続	2006年度 より継続	小計	割合(%)	金額(千円)
基盤S	1	2	1	2	2	8	0.6	136,300
基盤A	10	9	8	11	-	38	2.9	257,000
基盤B	37	39	37	29	-	142	10.7	381,000
基盤C	231	211	212	43	-	697	52.5	597,100
挑戦的萌芽	20	24	16	-	-	60	4.5	59,500
若手S	0	1	1	0	-	2	0.2	20,000
若手A	3	4	4	1	-	12	0.9	26,500
若手B	105	127	79	26	-	337	25.4	278,300
若手スタ	13	19	-	-	-	32	2.4	29,090
小計	420	436	358	112	2	1,328	100.0	1,784,790

平成13年度(2001年度)の数学分野の新規および継続の科研費採択件数(採択年度、研究種目別)

採択年度	2001年度 新規	2000年度 より継続	1999年度 より継続	1998年度 より継続	小計	割合(%)	金額(千円)
基盤S	1	-	-	-	1	0.1	15,200
基盤A	12	7	8	5	32	3.1	249,500
基盤B	57	51	45	5	158	15.3	497,900
基盤C	229	227	66	20	542	52.4	619,700
萌芽	29	27	15	-	71	6.9	53,800
奨励A	121	109	-	-	230	22.2	224,900
小計	449	421	134	30	1,034	100.0	1,661,000

3. 物理学分野の申請件数の増加の理由

一方、物理学分野の申請件数の増加の理由を調べてみようと平成 13 年度と平成 22 年度の採択の様子を見てみました。物理系の研究者に理由を尋ねてみると、大学以外の国立研究所等の申請が伸びているのが原因ではないかという指摘がありました。これについては、詳しい

資料は省略しますが、平成 13 年度は大学以外の国立研究所等に所属する研究者代表者の申請が 93 件程度採択されていますが、平成 22 年度にはその数は約 240 件に増加しています。この背景には、これらの国立研究所等での運営交付金の減少があるようです。一方物理全体では平成 13 年度の 932 件から平成 22 年度の 1377 件と全採択件数を大きく増やしており、数学全体の採択件数の増加率を大きく上回っていますので、研究所関係ばかりではなく、大学の物理分野の研究者も申請の増加に寄与している事が分かります。実験系では、研究期間を短く設定した申請が多いかもしれません。これについては、次号で検討したいと思います。

4. より良い申請とより良い審査の為に

科学研究費補助金制度の趣旨は、学術振興会のホームページに次の様に掲載されています。

「科学研究費補助金は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。」

今後、様々な研究資金の在り方について検討していく必要がありますが、より多くの良い申請とより公正で良い審査が益々重要になってくると思われれます。

残念ながら、春の学会における科学研究費に関する特別講演会は中止になりましたが、今後とも科研費の申請および科研費の審査に数学会会員のご協力をお願いいたします。

教育研究資金問題検討委員会

文責：齋藤政彦